

# 伊豆半島沿岸部の風位語にみる地域差

太田 有多子

## 1、はじめに

本稿では、伊豆半島沿岸部の漁業に関する語彙の蒐集のために行った1986年7月、9月の臨地調査、1987年3月の確認調査より得られた資料から、伊豆半島沿岸部の風位語についてまとめた。

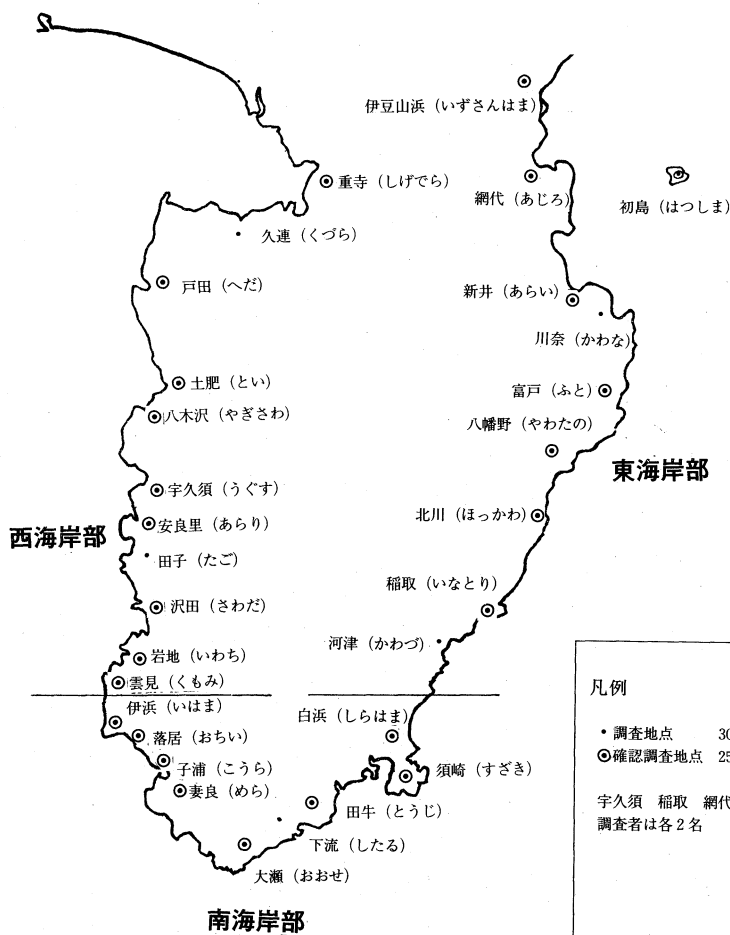
この調査は、山口幸洋氏を始めとする久木田恵氏<sup>(1)</sup>、河野敏宏氏、山口薫氏、山田健三氏、吉村理利氏そして太田の7名による共同調査である<sup>(2)</sup>。

調査地点は30地点（被調査者33名）で、漁業に従事していたか、現在も従事している方を対象に調査を行った。地点名は図1に示す通りである。そのうち、確認調査<sup>(3)</sup>ができたのは25地点（被調査者28名）であった。本稿は、全地点での資料をもとにしているが、各風位語の出現と使用に関しただけは、確認調査の可能であった25地点の資料によった。

伊豆半島沿岸部は、地形条件から南東岸の爪木崎、南西岸の波勝崎に境を置き、東海岸部、南海岸部、西海岸部に三区分される。（図1）

東海岸部は相模湾に面し、その地理的条件から東京と結び付きの強い観光地、レジャー地帯であり、太平洋につきてた形の南海岸部は黒潮の影響で南国的気候を持つ。そして、西海岸部は駿河湾に面し、三海岸部の中で最も平地が少なく、交通の発達の遅れていた所である。風位語と地形は密接な関係にあるものだが、本稿では、伊豆半島沿岸部において風位語にどのような特徴がみられるのかを、系統別に分けた風位語から探り、さらに風位語彙の地域差、風位語の風位の地域差と三区分される地形との関わり

図1 調査地点名



凡例

- ・ 調査地点 30地点
- ◎ 確認調査地点 25地点

宇久須 稲取 網代では被調査者は各2名

からもとらえていく。

## 2、伊豆半島沿岸部における風位語の系統

本稿では、漁業に関する語彙のうち風の語彙、それも「風位を持つ語」のみを取り上げたが、今回の調査で得られた風位語は241語であった。

まず、これらを系統別にまとめる。キタ系統には、キタを始め、語の中に「キタ」を含むもの、例えばキタカゼ、キタッポー、キタナライ、キタニシ等が属する。従って、キタナライ、キタニシのような複合形はそれぞれ、キタナライはナライ系統、キタニシはニシ系統にも属することになる。このように整理していくと、34系統<sup>(4)</sup>に分けられ、この中でまとまった語彙量をもつ風位語系統としては、方位の意味も含むキタ系統、ミナミ系統、ニシ系統に加えて、ダシ系統、オキ系統、サガ系統、ナライ系統、コチ系統、イナサ系統があげられる。(表1)そして、これらはほぼ全地点にみられる系統でもあり、伊豆半島沿岸部の風位語の特徴を成すものである。上記9系統の共通項としては、各系統とも代表風位語に〜ケ(弱風)、オー〜(強風)、〜ジケ(時化風)を付けた風位語を基本的に持ち、各系統の主な風位から他の系統の風位へ寄ると二系統が結び付き、例えばキタナライ、キタニシというように複合形風位語を作る。また、ダシ系統、ナライ系統、ニシ系統は地名等の固有名詞の付いた風位語を有している。

### 2-1、主な系統の風位

次に、伊豆半島沿岸部全域における主な系統の風位をみていく。

キタ系統は北西〜北〜北東からの風だが、西寄りのキタニシ、東寄りのキタナライを除けば、主に北からの風位語系統である。

ミナミ系統は南東〜南〜南西からの風で、これも東に寄ったコチミナミ、イナサミナミや、強風や時化で東西にゆれることのあるオーミナミ、ミナ

表1 系統別風位語表

系 統	語彙数	風 位 語
キ タ	10	キタ・キタカゼ (キタノカゼ) ・キタッポ (一) ・マキタ ・スギタ・キタツケ・キタジケ・アマギタ・キタナライ・ キタニシ
ヒガシ	5	ヒガシ・ヒガシカゼ (ヒガシノカゼ) ・ヒガシモン・ マヒガシ・ヒガシヨリ
ミナミ	18	ミナミ・ミナミカゼ (ミナミノカゼ) ・ミナミッポ・ ミナミモン・マミナミ・ミナミッケ・ミナミノソヨソヨ・ オーミナミ・ミナミジケ・アメミナミ・ミナミヨリ・ ヨリミナミ・ミナミオキ・ミナミオカ・ミナミヨー・ ヨ (一) ミナミ・イナサミナミ・コチミナミ
ニ シ	32	ニシ・ニシカゼ (ニシノカゼ) ・マニシ・ホンニシ・ ニシッケ・ニシッコ・ニシノソヨソヨ・ニシヨー・ オーニシ・ニシバヤテ・アメニシ・カラニシ・ヨニシ・ タカニシ・ナカニシモン・ニシジオテ・ナツニシ・ シットリニシ・ハマニシ・ワカニシ・ワカレニシ・ アカニシ・ボロニシ・ホーライニシ・タイコ (一) ニシ・ ドンド (ン) ニシ・シモ (一) フサニシ*1・ ボンデンニシ*2・ニシオキ・サガニシ・ダシニシ・ キタニシ *1 下総 (地名) *2 梵天祭10/28
ダ シ	15	ダシ・ダシカゼ (ダシノカゼ) ・ダシッケ (ダシノケ) ・ ダシジケ・ダシバヤテ・アマダシ・ジダシ・トコロダシ・ シゲダシ・カワズダシ*3・シラダダシ*4・オキダシ・ ナライダシ・ダシナライ・ダシニシ *3 河津 (地名) *4 白田 (地名)
オ キ	14	オキカゼ (オキノカゼ) ・オキモノ (オキモン) ・ オキモンノカゼ・マオキ・オキッケ・オキブキ・オキカゲ ・ナガシオキ・オキダシ・オキナライ・オキイナサ・ ミナミオキ・ニシオキ・オキベッター

系 統	語彙数	風 位 語
サ ガ	9	サガ・サガカゼ (サガノカゼ) ・サガッポ (ー) ・ サガッケ・サガジケ・カラッサガ・サガオロシ・サガニシ ・サガナライ
ナライ	41	ナライ・ナライカゼ (ナライノカゼ) ・マナライ・ ホンナライ・ナライッケ (ナライノケ) ・ナライヨー・ ナライノソヨソヨ・オーナライ・ナライジケ・ ナライバヤテ (ナライハヤテ・ナライノハヤテ) ・ ハヤテナライ・アメ (アマ) ナライ・ユキナライ・ シブキタナライ・シブクタナライ・シブクサナライ・ タナバタナライ・ジューガツノセーテンナライ・ アサナライ・ヨツナライ・ヨーナライ・ヨイゴシナライ・ ドンドナライ*5・タイコ (ー) ナライ*6・トイナライ*7 ・ウグスナライ*8・オーハマナライ*9・ シモダナライ*10・シモ (ー) フサナライ (シモーサナラ イ)*11・コーズサナライ*12・アオゲタナライ・ ナライジオテ・オキナライ・ジナライ・ダシナライ・ ナライダシ・サガナライ・キタナライ・コチナライ・ ナライゴチ・ナライナギ *5 どんどん焼き祭 1/14.15 *6 太閤 *7 土肥 (地名) *8 宇久須 (地名) *9 大浜 (地名) *10 下田 (地名) *11 下総 (地名) *12 上総 (地名)
コ チ	14	コチ・コチカゼ・コチッケ・オーゴチ・コチジケ・ コチバヤテ・アマゴチ・ヒルゴチ・ヨゴチ・ コチノヨーイレ・コチナライ・ナライゴチ・イナサコチ・ コチミナミ
イナサ	12	イナサ・イナサモノ (イナサモン) ・イナサッケ・ オーイナサ・イナサジケ・イナサバヤテ・ジイナサ・ オキイナサ・イナサコチ・イナサミナミ・イナサガエシ・ イナサノカワセ

※複合語等で二系統に渡る場合は重複

ミジケの他は、主に南から風位語系統である。

ニシ系統は南西～西～北西からの風で、風位語としては南に寄る風は少なく、また北に寄る風としてはサガニシが多いが、他の風位語はほとんど西風である。

次に、方位に限定されない風位語の系統であるダシ系統、オキ系統、サガ系統、ナライ系統、コチ系統、イナサ系統をみる。

ダシは日本海側、及び東海地方沿岸部に多くみられ、「山から吹き出す風の意味を持つ」<sup>(5)</sup>といわれており、当地域でも、「ダシは、陸から沖へ吹き出す風（出し風）のことである」と、各被調査者のダシの意味づけははっきり成されていた。従って、ダシは各地点の漁港の向きによってその風位が決まる。そういった意味では、ダシ系統には特定の風位はないといつてよいが、当地域では、その総風位は南西～西～北西～北東からの風と、範囲が広がってはいるものの、一部を除いて、ほぼ西から北に、または東から北に寄った方位からの風となっている。漁港が、東海岸部では東～南、南海岸部では南、西海岸部では西～南の方向を向いている所が多いためである。

同じように、地形に関係する風位語としては、沖からの風であるオキ系統がある。

オキ系統もダシ系統の対を成す形で広範囲の風位を持ち、その風位は東海岸部では北東～東～南東からの風、南海岸部では東～南東～南～南西～西からの風、西海岸部では南～南西～西からの風となっている。

サガ系統は西～北西～北～北東からの風、特に北西～北からの風が多い。

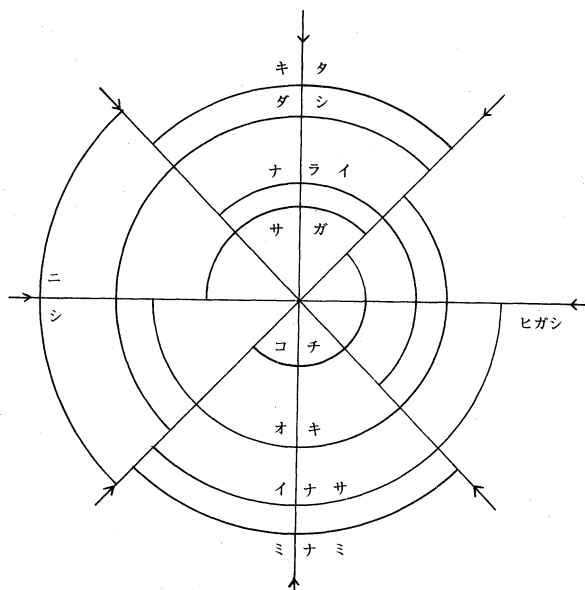
サガ系統のサガの語源については、伊豆地方で傾斜地のことをサガ、陰しいことをサガシーといい<sup>(6)</sup>、これと関係つけている説がある<sup>(7)</sup>。確かに、当地域でも、サガ系統の中でサガッケ以外のほとんどは強風の意味を持っているし、「サガは逆さの意味だ」<sup>(8)</sup>との報告もあった。しかし、「サガは相模湾と関係ある」<sup>(9)</sup>との報告もあり、今ひとつははっきりしない。ただ、サ

ガ系統の風位語は27地点で使われており、各地点ともサガの他、サガニシ、サガナライの使用がみられるが、その使い分けとなると、15地点ではサガとサガニシが同風位、2地点ではサガとサガナライが同風位、残りの2地点では3語彙とも同風位で、サガがサガニシもしくはサガナライと、またはその両方と同風位である地点が19地点もあった。このうち、同風位であってもサガニシが冬の風、突風であるとか、サガナライが冬の風であるとかのように風の性質で、サガと使い分けているのがわずか3地点で、残りの16地点では、サガはサガニシ、もしくはサガナライと同じ風として使われていることになる。このことから、サガニシ、サガナライとはいっても、例えば、キタ系統のキタに対する西寄りのキタニシ、東寄りのキタナライと違って、北西や北の方位から吹いてくる強風をサガとかサガニシといい、特別、サガの語に北や北西の方位の意味を持つものでないことがわかる。しかし、サガとは単に強風という風の性質だけなのか、「サガとはアマギオロシ（天城下ろし）のこと」<sup>(10)</sup>、「サガとはフジオロシ（富士下ろし）のこと」<sup>(11)</sup>、とかいう地点もあり、それはサガのような強風や下ろし風を作り出す地形と結び付いているのかもしれないが、当地域の各使用者の意識の中には、サガの中に一基準となる方位を持っているようだ。

ナライも「山竝と同じ方向に、吹いて来る風」<sup>(12)</sup>という語源説があるが、実際はどの山に沿ってか判じ難いことの方が多い。当地域では、サガ同様、ナライを地形と結び付いた風として、または風の性質からとらえるよりは方位としての意識の方が強いが、語彙量が多い分、総風位も北西～北～北東～東～南東と広い。コチ系統のコチは、語源不詳ながらも、「こち（東風）吹かば」と歌で古くから知られていることもあってか、当地域でも、風位は1地点で北風<sup>(13)</sup>であることを除いては、東寄りの風と意識している地点が多かったが、実際は、南風と回答した地点もあり、その総風位は北東～東～南東～南～南西であった。

イナサも語源不詳語で、この系統は、2地点で北風、北東風<sup>(14)</sup>である

図2 伊豆半島沿岸部における主な風位語系統の風位



ことを除いては、東～南東～南～南西からの風である。ただ、イナサがサガ、ナライと違うのは、当地域のイナサには方位よりも、時化風または強風という特徴を持った東（または南東、南、南西）風、つまり風の性質がより強く意識されていることである。

図2は、以上の系統の風位を総合したものである。

## 2-2、主な系統の風位語彙量及びその出現と使用

さらに、主な系統の風位語彙量や確認調査による25地点における各風位語の出現と使用を見る。

キタ系統の語彙は10語と少ないが、前述の通り、主に北風であり、北風としてキタ（カゼ）(20地点)<sup>(15)</sup>、キタッポー（15地点）などはかなりの地点で出現している。ただ、北風としては他に、ダシ系統、サガ系統、地域によってはナライ系統の語彙がある。



ダシ系統の語彙は15語で、ダシ（カゼ）（24地点）、ダシッケ（21地点）を始め、ダシ系統の語彙の出現地点は多い。また、系統としてみた時、その総風位範囲は広いが、地形的にダシ系統の語彙が北風もしくは北寄りの風になる地点が多い。そのため、当地域では北風や北寄りの風にキタ系統よりもダシ系統を用いる地点が多く、その使用度は高い。

ナライは、東京湾を中心にして東日本太平洋側にみられる風位語といわれている<sup>(16)</sup>だけあって、当地域でも、ナライ系統は各系統の中でも語彙量が41語ともっとも多く、風位、吹き方、風位時期等によって細かく言い分けられている。中には、アオゲタナライ、タナバタナライ、コーズサナライのように数地点にしかみられない語彙や一地域にまとってみられる語彙もあるが、ナライ（25地点）、オーナライ（24地点）、ナライジケ（22地点）、ナライッケ（22地点）などはほぼ全地点に、ダシナライ（18地点）、キタナライ（12地点）、サガナライ（10地点）などもかなりの地点に出現している。さらに、ナライ系統は、特に北東～東からの風としての使用度が高いため、その他の東を中心とした風位語としてはヒガシ系統、コチ系統があるが、ヒガシ系統は語彙量も5語と少なく、その使用度も低いし、コチ系統は14語あり、コチ（24地点）を始め、コチッケ（17地点）、コチナライ（14地点）などは出現地点は多いが、主に春先の風位語として使い分けられている。

また、当地域の南東風は強風ということもあって、前述したようにイナサといえば、南東風というよりは南東を中心とした方位からの時化風、台風に伴う強風である。イナサもナライ同様、関東を中心として太平洋側一帯に使われている風位語だとの報告があり<sup>(17)</sup>、当地域でも、イナサ系統の語彙は12語と少ないが、イナサ（25地点）を始め、イナサジケ（21地点）、オーイナサ（13地点）、イナサッケ（15地点）などは出現地点も多く、使用度も高い。

南を中心とした方位からの風には、先に挙げたコチ系統やイナサ系統が

あるが、これは吹く時期の限定された風であり、一般的にはミナミ系統や、その方角が沖になる地点が多いこともあってオキ系統が使用されている。ミナミ系統には15語あり、ミナミ（23地点）、ミナミッケ（24地点）、ミナミジケ（24地点）、オーミナミ（18地点）などは出現地点も多く、使用度も高い。

オキ系統は総風位範囲が広いこともあって、語彙も14語あるが、使用度の高い語彙はオキカゼ（13地点）、オキモノ（オキモン）（10地点）ぐらいである。

ニシ系統の語彙は32語と、ナライ系統に次いで多く、西風を中心とした風位では独占的な系統である。そして、ニシ系統の語彙の使用度は全体的に高い。ただ、ニシ系統も、ナライ系統同様、ニシ（カゼ）（25地点）、ニシッケ（23地点）、オーニシ（23地点）のように、ほぼ全地点に出現している語彙もあれば、ナツニシ、シットリニシ、アカニシなどのように数地点でしか見られない語彙もある。また、西海岸部もしくは南海岸部にしかみられず、東海岸部と地域差を成すような語彙を有している系統でもある。

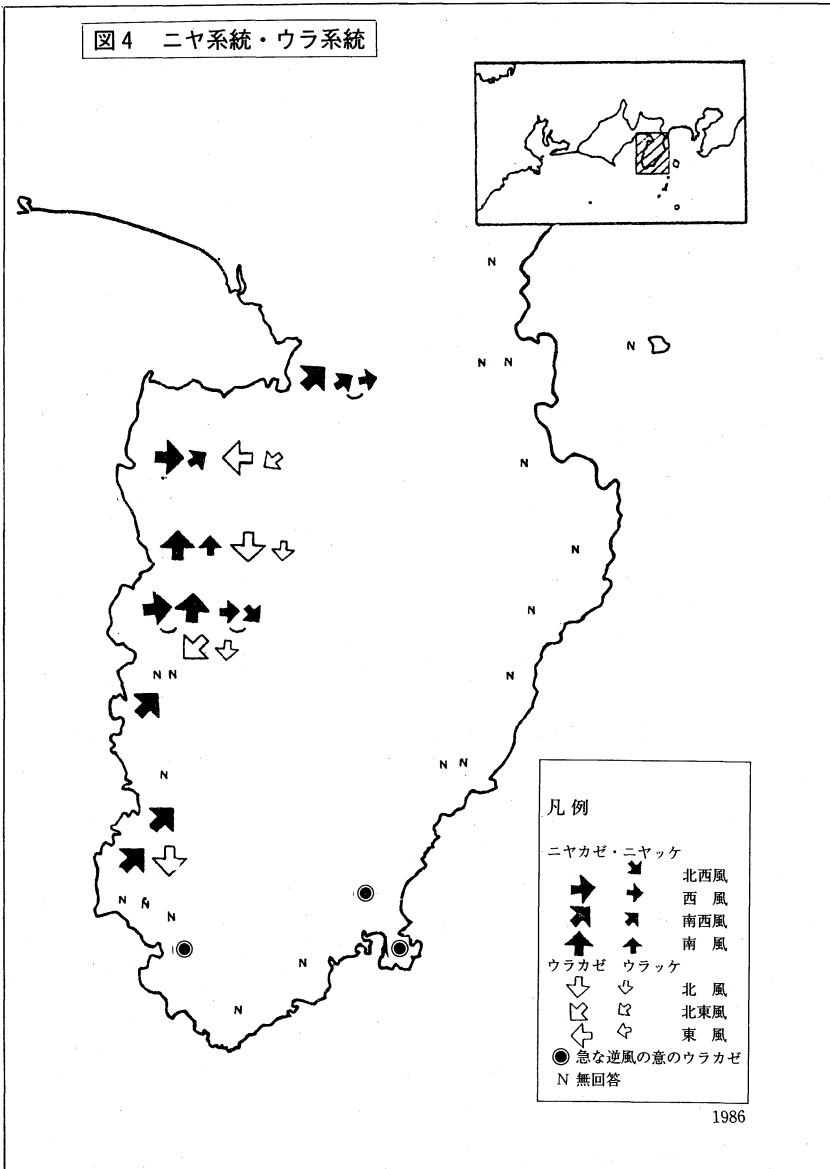
サガ系統は語彙量としては9語と少ないが、サガは「静岡・神奈川・東京・千葉の沿岸地方」で使われていると、関口氏の報告<sup>(18)</sup>にもあるが、当地域でもサガ（17地点）、サガニシ（19地点）などを始めサガ系統の語彙の使用度は高い。ただ、南海岸部ではサガ系統の出現が少ないため、全体の出現地点数は若干少なくなっている。

### 3. 風位語と地域差

今までは、風位語を系統で分け、系統からみた当地域の風位語の特徴をみてきたが、ここで個々の風位語を取り上げて、風位語の地域差はどんな形で表われているかを見、風位語の地域差という問題を考える。

# 伊豆半島沿岸部言語地図

図4 ニヤ系統・ウラ系統



### 3-1、一地域にみられる風位語

当地域は、言葉の伝播に海上交通が大きな働きをしている土地のため、全域にみられる風位語や各地点に散在している風位語はあっても、一地域にみられる風位語は少ない。伊豆半島という規模が、風位語の地域差を見るには狭いといえるかもしれないが、少ないながらも、一地域にみられる風位語としては以下のものが上げられる。図3には、それぞれの地域にみられる風位語の代表例をあげた。

- (1) 東海岸部を中心とした風位語：タイコ（－）ナライ・ドンドナライ  
・シモ（－）フサナライ（シモサナライ）
- (2) 西海岸部を中心とした風位語：タイコ（－）ニシ・ヨニシ・ワカニシ・ボンデンニシ・ワテ系統（ワテ、ワデ）・クロップキ・ヨーイレ・ダシニシ・ダシバヤテ・キタジケ・サガッケ・オーカーラ・ニヤ系統（ニヤカゼ、ニヤッケ）・ウラ系統（ウラカゼ、ウラッケ）・コチナライ・オーヤマゼ・ヤマゼッケ・ジアラシ
- (3) 南海岸部にみられる風位語：ヨイゴシナライ・コチノヨーイレ

ただ、西海岸部を中心とした風位語でも、ヨニシ、ヨーイレ、キタナライ、ジアラシは東海岸部北部に位置する新井、網代、初島、伊豆山浜辺りでもみられる。このように海岸部ごとにみると、西海岸部の方に独自の語彙が多い。また、西海岸部ではニシ系統を始め、ワテ系統、クロップキ・ヨーイレなど西の方位からの風位語に、東海岸部では北東～東の方位からの風位語であるナライ系統の中に独自の語彙を持っていることがわかった。これは、西、東海岸部それぞれで、沖からの風に注意を払って、特徴ごとに呼び分けているためといえる。補足ながら、各地点の総語彙量では

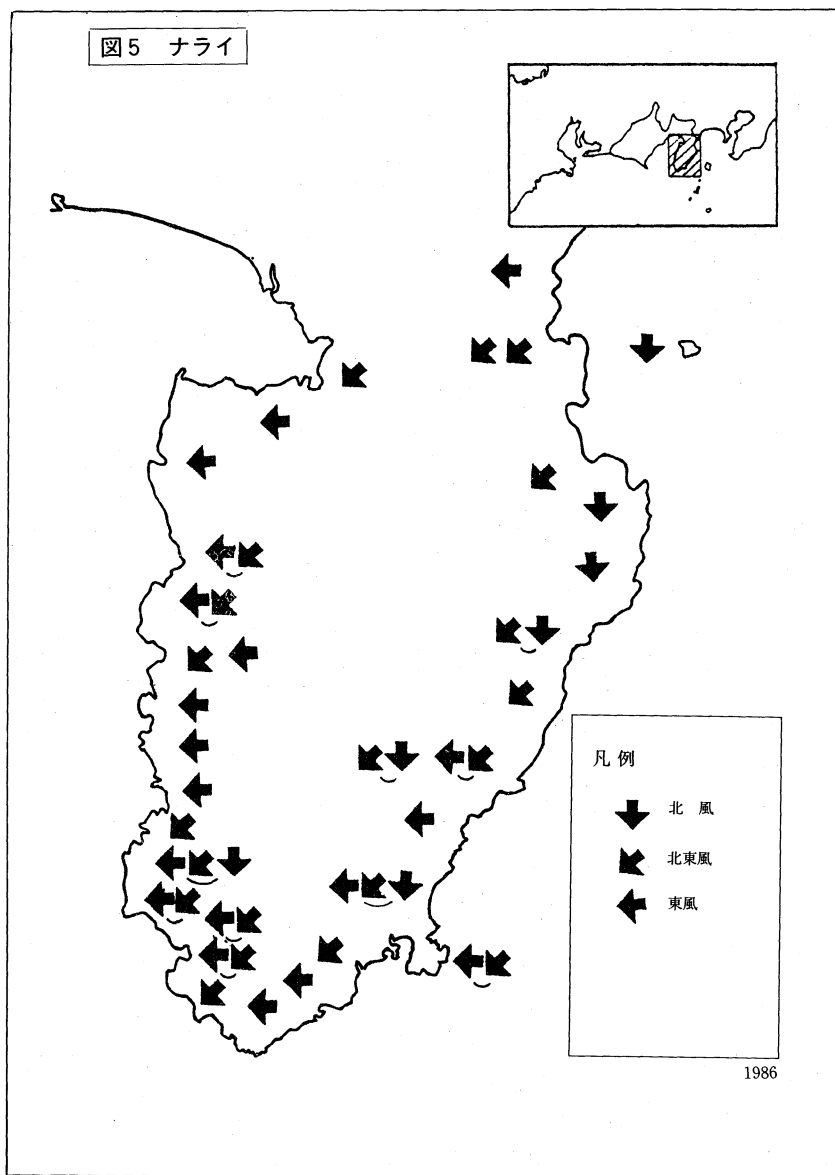
東西差はないが、表2のように、西風と東風または東北風の語彙量のみを比較すると、西側は妻良を境にして13地点中8地点で西風の方が語彙量が多く、東側では南海岸部の大瀬を境にして12地点中8地点で東風または東北風の方が多くなっている。これも、西海岸部及び南海岸部でも駿河湾に

表2 各地点の北東風・東風・西風の語彙数

地 点 名	北 東 風	東 風	西 風	そ の 他	総 数
重 寺	9	4	9	19	41
戸 田	2	12	10	41	65
土 肥	2	15	10	39	66
八 木 沢	7	4	8	28	47
宇 久 須 1	14	5	10	39	68
宇 久 須 2	1	6	9	31	47
安 良 里	1	13	9	44	67
沢 田	6	5	13	41	65
岩 地	4	2	7	33	46
雲 見	11	6	13	35	65
伊 浜	3	9	11	43	66
落 居	3	4	5	31	43
子 浦	13	6	11	41	71
妻 良	6	2	11	42	61
大 瀬	1	12	7	29	49
田 牛	14	4	6	18	42
須 崎	6	16	6	36	64
白 浜	17	7	5	26	55
稲 取 1	14	5	13	52	84
稲 取 2	6	10	4	15	35
北 川	13	11	3	15	42
八 幡 野	6	1	6	27	40
富 戸	3	3	3	19	28
新 井	8	3	10	35	56
網 代 1	15	10	13	41	79
網 代 2	11	2	9	25	47
初 島	3	2	9	27	41
伊 豆 山 浜	2	5	3	20	30

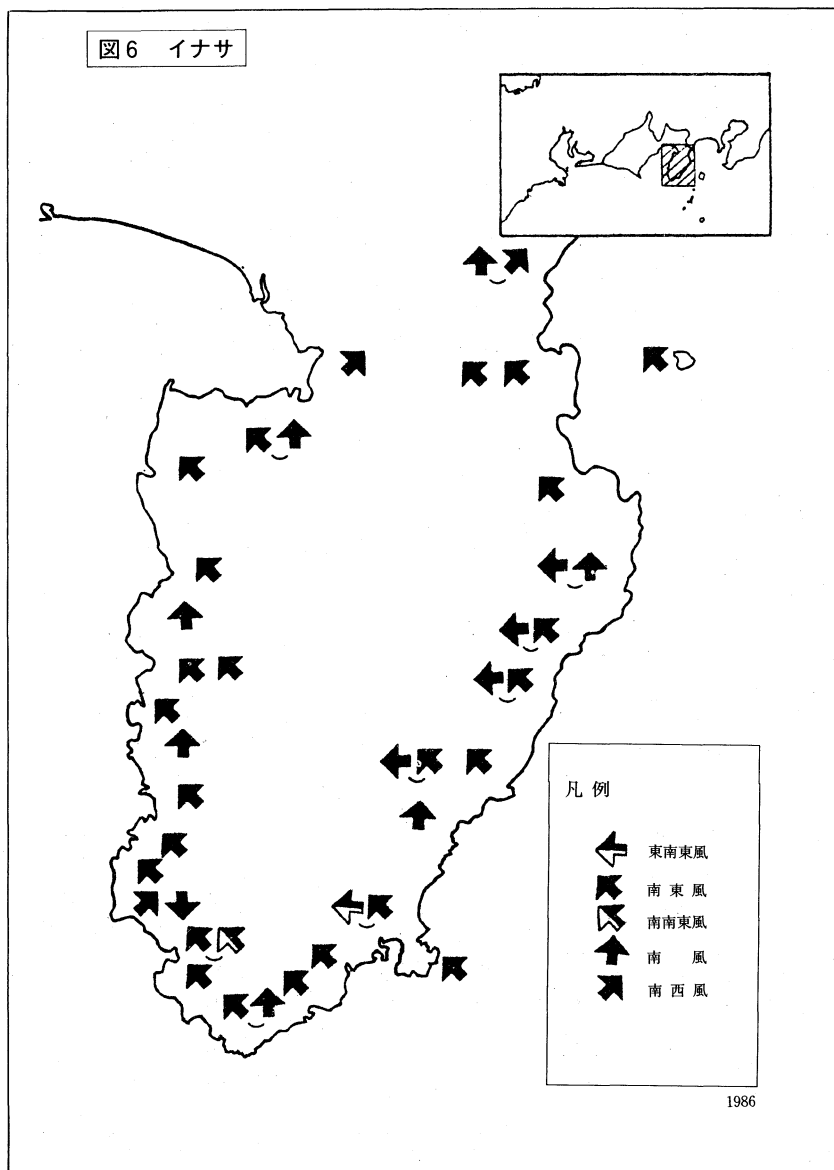
# 伊豆半島沿岸部言語地図

図5 ナライ



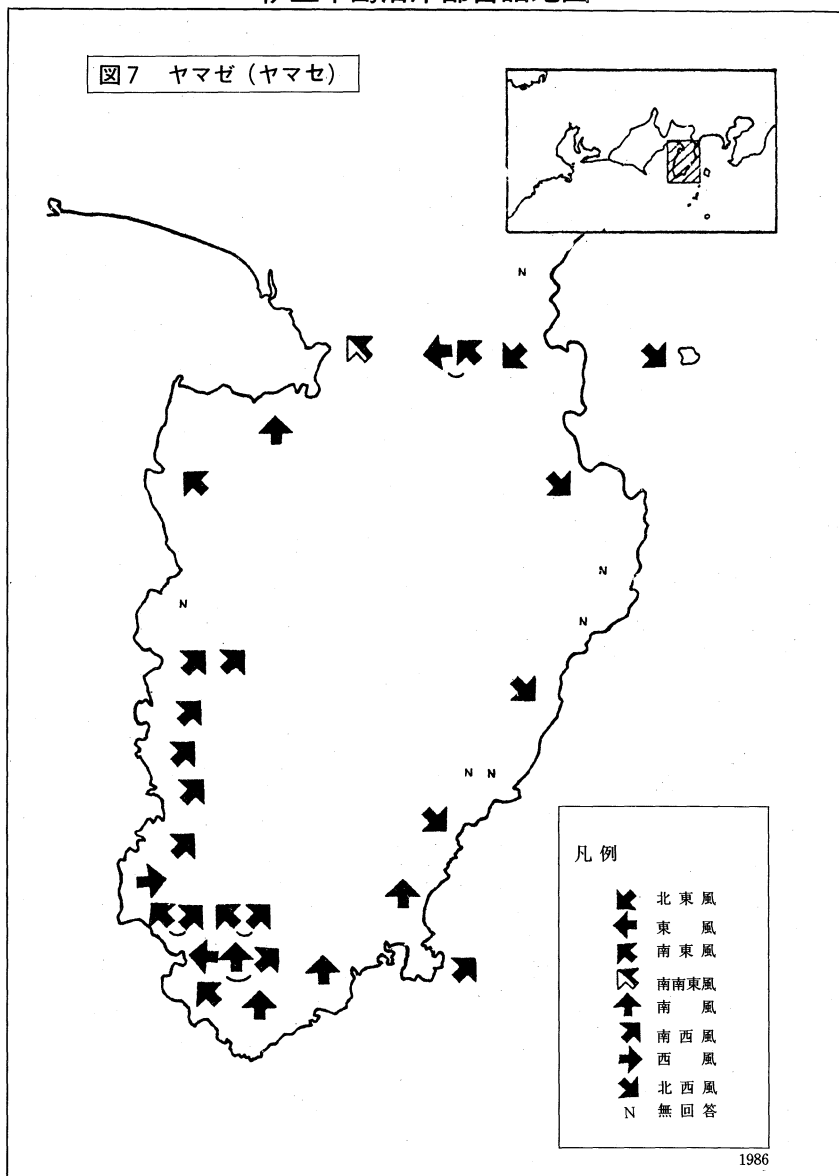
# 伊豆半島沿岸部言語地図

図6 イナサ



## 伊豆半島沿岸部言語地図

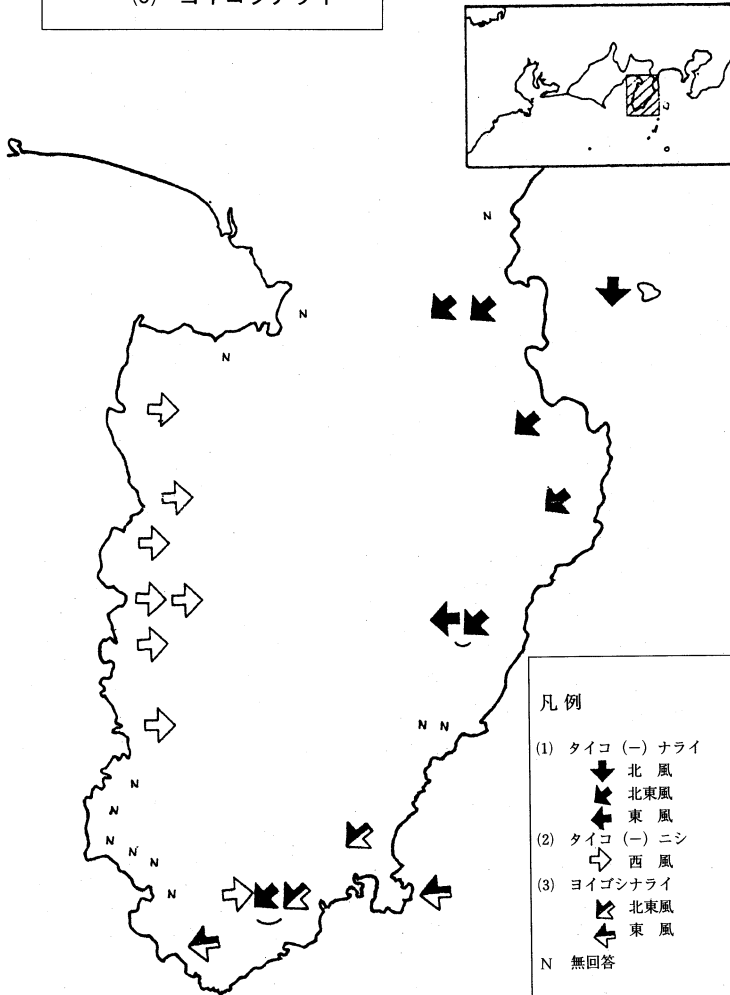
図7 ヤマゼ (ヤマセ)





# 伊豆半島沿岸部言語地図

- 図8 (1) タイコ(一)ナライ  
(2) タイコ(一)ニシ  
(3) ヨイゴシナライ



面した地点では西風に、南海岸部から東海岸部にかけてでは東風または北東風に関心が強いのである。

尚、当地域では各地点、各海岸部の地理的条件がまちまちであるし、調査地域が風位語を扱うには狭いこともあって、地点ごとで一風位語の風位が違ったり、吹き方が違ったりすることはともかく、語の地域差という点で、上記のような一風位語の地域による使用の有無はあっても、一風位語の意味が全く違うということはあまりない。わずかにウラカゼのみが、西海岸部では駿河湾内の南からの風であるニヤ系統に対する「駿河湾の北からの風」であるのに対して、南海岸部では「急な逆風」のことであった。

(図4)

### 3-2、風位に地域差のみられる風位語

風位語は、ダシ系統やオキ系統のように地形に関係する語以外は、一地域において主な風位を示すことができる。そして、各風位語とも、地点ごとに見れば、その風位に多少の違いが見られるものだが、地域全体からみた時、一風位語の主な風位に地域ごとのまとまり、地域差のみられるものがある。ここで、風位に地域差のみられる風位語を取り上げ、当地域の特徴をみてみる。図5はナライの風位を示したものである。ナライは、西海岸部から南海岸部にかけて、主に東風となっているが、東海岸部では北風となっている地点が多い。ナライの他、ナライッケ、オーナライ、ナライジケにも同様の風位差がみられた。西、南海岸部では、地形からキタの他にダシが主に北風になるのに対して、東海岸部の新井、網代、初島、伊豆山浜の辺りでは主に西風のことであり、北からの主な風位語はというとナライである。そして、北風をキタ、キタッケ、キタジタというよりはナライ、ナライッケ、ナライジケという地域である。さらに、西、南海岸部ではナライは主に東風となっており、東海岸部では東風一般をオキカゼ、オキモンという。図6に示したイナサも西、南海岸部では主に南東からの風

だが、東海岸部の5地点では東南東～東からの風でもある。また、図7のヤマゼも西海岸部では南西風、南海岸部では南西～南～南東風、東海岸部では北西風となっている。当地域でのヤマゼについては、地点によって強風とも弱風ともいい、語源がはっきりしていないことも留意しなければならない<sup>(19)</sup>が、少なくとも、西海岸部宇久須～南海岸部では沖からの風であるのに対して、東海岸部では陸からの風となっている。このように、当地域の風位語の風位差については、西、南海岸部と東海岸部との間に差が見られる。伊豆半島東側では、ナライ系統の他に、その風位よりも時化風、台風に伴う強風としての意識の方が強いイナサも、西側より北寄りの風位になるのは地形条件の差、相模湾の影響といえないか。そして、東海岸部でも半島の根元に位置する網代、伊豆山浜、新井では西側と同じ風位であるのも、相模湾の影響を東側の他の地点ほどには受けないためといえないか。

#### 4、ま と め

ここで、伊豆半島沿岸部における風位語の特徴をまとめる。まず、総風位語を系統別にみると、語彙量の多い系統として、キタ系統、ミナミ系統、ニシ系統、ダシ系統、オキ系統、ナライ系統、コチ系統、イナサ系統、サガ系統があげられる。そして、これらは全地点でみられる系統でもある。その総合風位を図2に示したが、当地域での主な風位は、地形によって風位の決まるダシ系統、オキ系統以外は、ほぼキタ系統が北風、ナライ系統が北～北東～東風、コチ系統が東～南東風、イナサ系統が南東～南風、ミナミ系統が南風、ニシ系統が西風、サガ系統が北西～北風であった。各風位語の使用の有無からみた地域差は、南、東海岸部より西海岸部の方に独自の風位語を多くみいだした。また、各地点の語彙量に地域差はみられなかったものの、西風と東風または東北風との語彙量を比較した時、西海岸

部～南海岸部妻良では西風の方が多く、東海岸部～南海岸部大瀬では東風が多かった。さらに、地形と関係する風位語以外で、同風位語が地域によって風位差がみられるものとしては、ナライ系統（ナライ、ナライッケ、ナライジケ）、イナサ、ヤマゼがあるが、これらは西、南海岸部と東海岸部とで風位差がみられた。ただ、東海岸部でも北部の地点では西海岸部と同じ風位となっている。先にみた使用の有無に地域差がある語彙の中でも、西海岸部を中心に分布していながら、東海岸部の北部にもみられる語彙があった。これは、東海岸部とはいえ北部の方では、西海岸部と似た風位語体系を持っているといえる。

以上のことから、伊豆半島沿岸部における風位語の様々な特色は、西海岸部を中心に南海岸部の駿河湾に面した地区や東海岸部北部を含めた地域と、その他の東海岸部、南海岸部の三地域に分けられるといえようか。

風位語は、船を交通手段とする海上生活者と密接な関係にあたるためか、各風位語の使用範囲はかなり広い地域に渡る場合が多く、その地域差を見るためには、太平洋側、日本海側、瀬戸内海側というレベル、時には日本全体から捉えなくてはならない。しかし、今回のように伊豆半島という風位語を扱うには狭い地域であるにもかかわらず、地理的条件、使用者の意識、風位語自体が持つ条件が、あまりにも様々であるために、本稿でも、伊豆半島沿岸部の風位語の特徴、体系をまとめきれない点もあり、今調査も含め、風位語をどのように扱うかが、今後の大きな課題となった。最後に、今回の調査にご協力下さいました方々に、改めてお礼申し上げます。

#### 〈注〉

- (1) 久木田 恵氏は、すでに「伊豆半島の風の語彙」(『名古屋・方言研究会会報』第5号 1988年6月刊)を発表している。
- (2) 「静岡県史」に関連しての調査
- (3) 確認調査とは、最初の調査から得られた全風位語を再度、各被調査者に使用

の有無・風位・特徴等を調査したものである。

- (4) 208語が34系統に属し、どの系統にも属さない語彙が33語あった。
- (5) 「風の地方名の研究(3) - 山から吹出す風の名称 特にダシに就いて -」  
関口 武
- (6) 『静岡県の方言』『日本国語大辞典』『静岡県方言辞典』に記載
- (7) 『分類漁村語彙』柳田國男・倉田一郎共著  
「関東では阪をサガと濁つて発音してゐるが、風名のサガも同じで、高くから吹きおろす有難からぬ風の意である。」
- (8) 八幡野
- (9) 当地域では、相模湾のことを「さが」と呼んでいる地点もあった。
- (10) 八幡野
- (11) 新井
- (12) 『風位考資料』柳田國男
- (13) 稲取 1
- (14) 落居：北風  
白浜：北東風(但し、この風はイナサガエシ、イナサノカワセ)
- (15) ( ) 内の数字は出現地点数、つまり被調査者が使用するとした地点数
- (16) 『増補風位考資料』『風位考』柳田國男  
「風の地方名の研究」関口 武  
『風の事典』関口 武
- (17) 「風位考」柳田國男 (『増補風位考資料』)  
「風の地方名の研究(4) - 暴風の名称 主として台風来襲時における暴風の名称に就いて -」関口 武
- (18) 『風の事典』関口 武
- (19) 従来、ヤマゼとヤマセは同風位語と思われていたが、「風の地方名の研究 その2 ヤマジ(ヤマゼ)とヤマセ」(関口 武)で、それぞれが別風位語であることが明らかにされている。しかし、当地域においては両風位語が混同されているようだ。ほとんどの地点ではヤマゼだが、田子、北川、網代1、2ではヤマセを使用、稲取2ではヤマゼ、ヤマセを両用している。

#### 〈参考文献〉

- 『風の辞典』関口 武 1985年2月(原書房)
- 『増補風位考資料』柳田國男編 1942年7月(明世堂)
- 『静岡県の方言』山口幸洋 1987年11月(静岡新聞社)
- 『図説静岡県方言辞典』静岡県方言研究会・静岡大学方言研究会共編  
1987年3月(吉見書店)
- 『分類漁村語彙』柳田國男・倉田一郎共著<復刻版> 1975年10月(国書刊行会)

- 『生活語彙の基礎的研究』室山敏昭 1987年2月 (和泉書院)
- 『静岡県史』第1巻 1930年3月
- 『静岡県水産誌』静岡県漁業組合取締所 1894年2月
- 「伊豆半島の風の語彙」久木田 恵 1988年6月  
(『名古屋・方言研究会 会報』第5号)
- 「ナライ再考」田辺久之 1985年6月 (『常葉国文』第10号)
- 「風の地方名の二三に就いて(1)」関口 武 1940年  
(『地理学評論』第16巻第6号)
- 「風の地方名の二三に就いて(2)」関口 武 1940年 (『地理学評論』第16巻第7号)
- 「風の地方名の研究 その2 ヤマジ (ヤマゼ) とヤマセー」関口 武  
1941年 (『地理学評論』第17巻第10号)
- 「風の地方名の研究(3) 一山から吹出す風の名称 特にダシに就いて」  
関口 武 1942年 (『地理学評論』第18巻第3号)
- 「風の地方名の研究 (第4報) 暴風の名称  
一主として台風来襲時における暴風の名称について」関口 武 1942年  
(『地理学評論』第18巻第6号)